

がん教育

豊島区立千川中学校で公開授業

選択制・少人数授業で、がんを考えるきっかけに



「がん」の授業を聞く生徒たち

日本対がん協会は1月17日、豊島区立千川中学校でがん教育の出前授業を行った。

豊島区の小・中学校ではほぼ毎月、地域の方が授業を見学できる「としま土曜公開授業」が開かれている。千川中学校はこのとしま土曜公開授業で年2回、課題別学習教室を行っている。現代の社会問題を課題にした複数の授業を用意し、生徒それぞれが関心のあがる講座を選択する仕組みだ。講師は外部の専門家が務める。

この日は1、2年生を対象に、日本対がん協会による「がん」をはじめ、地盤工学会による「地震」、豊島区役所清掃環境部資源循環課による「ゴミ」など7つの講座が開講された。

豊島区はかねてがん対策に熱心で、

がん教育が受診率向上につながると考え、平成24年から、小学6年生と中学3年生の授業にがん教育を最低1時間取り入れることにしている。ただ、一部の保護者からはがんの話聞きたくない子もいるとの声も聞かれたという。そこで千川中学校は、がん教育をこの課題別学習教室に組み入れ、生徒自身が選べるようにした。

がんの講座には、36名の生徒が出席した。講師は、順天堂大学大学院教授で循環器専門医の佐瀬一洋先生。佐瀬先生は自身も5年前に骨軟部肉腫と診断され、手術と抗がん剤治療を終えている。当時の驚きとショックから話し始め、罹患率の性別、年齢別グラフなどを示しながら、「みんなも、がんが身近だとはあまり感じていないかもしれない。でもたとえば、ご両親はがんになる人が増えてくる年代かもしれないね」と語りかけた。

日本人の2人に1人ががんになること、3人に1人ががんで亡くなることを説明し、「今もがんと闘っている人たちのケアもとても大事なこと」と力を込めた。

今回、生徒たちにできるだけ多く発言する機会を与えようと、佐瀬先生は随所に工夫を凝らした。中でも生徒たちが一番盛り上がったのは、倍々ゲーム。順々に生徒が指され、 $2 \times 2 = 4$ 、 $4 \times 2 = 8$ 、 $8 \times 2 = 16$ …と、前の生徒が答えた数字の2倍の数を答えていく。あっという間に答えは1万、10万と大きな数字になっていく。倍々ゲームをがん細胞の増殖の様子に例えて、早期発見・早期診断が大切だと話すと、生徒たちは真剣に聞き入っていた。

佐瀬先生ががん教育の講師を務めるのは4回目。訪れた学校の先生たちからヒントを得て、こうした子どもとのコミュニケーション方法を考えた。また、どの学校でも中学生たちの感受性の豊かさを実感したという。

最後に「何よりも大切なのは、命や生きているということ。命をつないでくれた家族や周りの人に、思いやりの気持ちを持つこと。今日帰ったら、こんな授業をしたよ、と家族と話さきっかけにしてほしい」とメッセージを送った。

独自の教材を作成、全小・中学校でがん教育を実施

豊島区は、全国に先駆けて独自のがん教育プログラムを実施している。その取り組みについて、同区教育委員会の教育指導課指導主事の松原貴志さんにお話を伺った。

豊島区は平成23年にがん対策推進条例を施行し、がんの予防・早期発見を推進するための施策のひとつとして、「教育委員会と協働し、健康教育の一環として、児童・生徒及び保護者に対して、がんの予防に関する普及啓発を図る」という一文を盛り込みました。



区作成の指導の手引き

この条例に基づき、区教育委員会は翌年から小学校6年生と中学3年生の保健の授業でがんに関する教育を行うよう教育課程に位置づけました。専門的な知識のない教員にとって教材の作成は負

担でしたが、この負担を軽減するため、国立がん研究センターと共同で、教材と指導の手引きを作成しました。

教材は、わかりやすいスライド形式で、教員自身が必要に応じてカスタマイズすることもできます。指導の手引きは、スライド教材を見せながら解説するための台本にあたります。

あわせて教育委員会では、保護者の理解を得るため、がんに関する教育の目的や内容を説明したリーフレットを全家庭に配布しました。また、授業を実施する前に、学年だより等で授業内容を周知するなど、保護者の皆様との連携に力を入れています。今後、各学校における創意工夫ある授業実践を区内全小中学校で共有するなど、さらにがんに関する教育が充実するよう取り組んでいます。



松原貴志さん